慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	蠟山政道編『政黨』
Sub Title	M. Royama & others : Political party
Author	多田, 眞鋤(Tada, Masuki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1955
Jtitle	法學研究:法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and
	sociology). Vol.28, No.1 (1955. 1) ,p.72- 74
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19550115-0072

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

七二 (七三)

政黨の本質とその問題」いわば

書の構成と分擔執筆者をそれぞれ紹介しておこう。 本書の總論的部分より順を追つて紹介したいと思うが、はじめに本

蠟山教授の擔當になる「第一話

「政黨の本質とその問題 蠟山政道氏

政黨と權力」

日本の政黨

である。

「外國の政黨」

「政黨の組織と機能」 中村菊男氏 小松春雄氏

川原次吉郎氏 横山桂次氏

原則において一致している人々が、その主義または原則に基づいて くるのである。政黨の存在は、かかる「代表概念」の日常化によつ して成就しうる歴史的過程を通つて「代表」の問題が日常化されて クの定義)という存在になるのである。 國民的利益を增進せんがために協力すべく結合した團體」**(E・**バー て意義づけられてくるのであり、「政黨とは 或る特定の主義または 政治より、代議制に移行し、國民の政治的統一が、代議制を媒介と 皇制」は、政治學上で意味する「代表」という概念ではなく、君主 在であることを强調され、その存在意義を論理的に證明される。 「忠君愛國という民族的倫理による精神的つながり」としての「天 一 蠟山教授は、近代民主國家において、政黨が必要不可缺な存

その區別は「程度の差」にあるが、政黨の屬性として、安定組織の た政黨は、パトロネージの點においても、公私の比重においても、 (愛國公黨)によつて論證される。 元來、 朋黨を母體として發生し しかして、政黨は朋黨、私黨、徒黨と異る故、その差異を具體例

蠟山政道編

吸 黨

以があろう。 ラシーの後進性と正比例した政治學研究の後進性が問題視される所 の重要なるにもかかわらず、餘りにも數が少ない。ここにもデモク 來「政黨」をプロパーな課題として取扱つた邦語文献は、その對象 動向が重要な役割を演ずることは議論の餘地がない。しかるに、從 民主國家における政治運用方式にとつて、政黨の存在、その

そして、この試みは、敢えて評するならば、ある程度所期の效果を 試みた。」と編者蠑山教授は、その「はしがき」に述べておられる。 ると共に、特殊の性質や特徴をもつ日本の政黨についてその解明を 「政黨というものを外國のそれを含めて一般的に、理論的に究明す

擧げえたといえよう。

ウェルの學説を中心に説かれ、リーダーシップの重要性を指摘され 民意識の成長」なのであり、「人間性の奥底に潜む災派心」 は、政黨は成立しないのである。つぎに、政黨分立の過程を、 具有と、公約政策の實現への努力の二點をベトーネンされる。 政黨を發達せしめる客觀條件は、「代議政體の成立」および「公 p 1

る。萱業革命を經驗したのちの政治狀況において、

問題視されるの

l

は階級政黨の出現であり、この課題を、政治的(議會主義か暴力主

經濟的(資本主義か社會主義か)觀點より檢討されている。

を、一般選擧尾の政治意識の低迷と政黨のストラテジーにおけるモ **渉、資金、公明選擧の在り方等、實際知識を中心として論じておら** しての地盤獲得のための「顏」の作用を述べられ、 ラルの缺如に原因する旨指摘される。さらに、投票の「凝結體」と の「部外組織」を説明され、運管方法、諸活動、 領袖等「政黨の部内組織」と、院外関、友誼團體、シンパ等 中村教授分擔による「第二話 政黨の組織と機能」 理想型としての議會政治と現實態としての選擧の矛盾 を述べ、「政黨と 選擧運動、

複雑性を説かれている。 さか第二話と重複している感があるが、 を動かす團體の差異によるとされ、「政黨の權力闘爭」、 つ」のであるから、直接的に權力を掌握する團體と、 糞の相違は、「いわば、 き起し、プレッシャー・グループスや勞働組合等の政治集團と、 小松助教授の「第三話 政黨は權力をもつが、 組織 政黨と權力」は、「人間と權力」から說 リーダー・ 政

薬組織の

官僚化の

原因を 政治資金の各論は、 壓力團體は勢力をも その過程、 いさ 政

. 點に指摘されている。

くるとされる。 がもたらした政治權力の集中化と執行權の强化、何以上のシチュエ 政黨組織の内部におけるヒェラルヒーの出現として特徴づけられて 來る秘密保持、機動力發揮のための組織の强化、自社會體制の動搖 量的增大より結果した組織の强化と、 すなわち、分マス・デモクラシー期における政黨は、 ションを背景として、マスのカリスマ的支配への欲求、これらが 中央集權化、台利害對立より メンバ 1

臨時國會における吉田總理の引退問題にまで論及されている。 ら全體主義的政治體制への移行、さらに、終職後の政黨を、第二〇 衰退過程、二·二六事件、 クラシーの概況を論ぜられ、五・一五事件を契機とした政黨政治の 友會を中心とした政黨内閣制の確立、普選運動等の明治、大正デモ 運動の概要、政黨の離合集散の狀況、政黨の發展過程、 **治一四年成立の自由黨、等初期政黨の性格、および國會開設、立憲** 意義を論ぜられ、愛國公常より愛國社に愛展する過程、 を保有するを以てモチーフとした「民選議院設立建白」書の提出の した愛國公黨の出現より始まり、「有司」の專斷を排し、「通義權理 川原教授擔當の「第四話 新體制運動、翼賛政治會等、政黨政治か 日本の政黨」は、明治七年一月に成 愛國社、 阴

ランス、ドイツ、ディクテターシップとしてソヴィエトを取擧げて してのイギリス、 裁體制下の政黨の役割に觀點を据えて、ポラリゼーションの典型と 政黨の近代化の軌跡、政治の民主化の過程と、臼特殊な例として獨 横山助教授の分擔になる「第五話 アメリカを取扱い、デポラリゼーショ 外國の政黨」は、八各國

紹

七四 (七四)

おられる

まず、二大政黨對立の起源として、ホィッグ、トーリーの對立かまず、二大政黨對立の起源として、成立立法、一定容の自由主義」によつて成育して來た勞働黨、および國民政黨として成長する多くの利害關係を調整し、その最大公約數を代表することになるか多くの利害關係を調整し、その最大公約數を代表することになるか多くの利害關係を調整し、その最大公約數を代表することになるから、移種な政黨とならざるをえなくなる」と二大政黨として、大・リーの對立かます、二大政黨對立の起源として、ホィッグ、トーリーの對立かます、二大政黨對立の起源として、ホィッグ、トーリーの對立か

れる。(昭和二九年一二月有妻閣發行 二三〇圓) は、斯學を志す學徒にとつてかなり有益な參考書であろうかと思わ論」を、各この視角から取擧げ、問題點をクローズアップした當書論」を、各この視角から取擧げ、問題點をクローズアップした當書は、斯學を志す學徒にとつてかなり有益な參考書であろうかと思われる。(昭和二九年一二月有妻閣發行 二三〇圓)

(多田眞鋤)